



## 太宰治 『津軽』 (抄)

このテキストは、太宰治の名作『津軽』の魅力に触れていただくために、その名場面を抜粋したものです。ダウンロードして、真中で折って綴じていただくと、小冊子になります。

また、本テキストに基づき、朗読オーディオブックが販売されています。是非お聴きください（朗読は、序章冒頭部分以降です）。オーディオブックは、DI-MARKETで販売されているほか、iTunes-store 等でのネット配信、アマゾンでのCDなどが近日中に販売予定です。

二〇一〇年九月

^ 声を便りにVオーディオブック

## 目次

### ● あらすじ

#### ● 序編冒頭部分

#### ● 本編冒頭部分

● **ハイライト場面①** 蟹田での親友N君と二十年ぶりの旧交を温める場面

● **ハイライト場面②** 観瀾山での志賀直哉談義

● **ハイライト場面③** 津軽人の疾風怒濤の如き接待振り

● **ハイライト場面④** 本州最果ての地の竜飛崎の凄愴な光景

● **ハイライト場面⑤** 金木の生家で兄たちとの再会して気疲れ。

● **ハイライト場面⑥** 念願かなった子守のたけとの三十年ぶりの再会

### ● あらすじ

ある年（注：昭和十九年）の春、生まれ故郷の金木のある津軽半島を三週間かけて訪問した。作業服にズック靴という洒落者には似合わない姿での訪問だ。上野発の夜行列車で朝八時に青森に着いた。T君宅で蟹田行きバスの時間を待った。東京は食糧難だが、男の意地で食べ物、白米の哀訴嘆願だけはすまいと心に決めてきた。が、そんな用心は無駄だった。白米はどこでも出なかった。

青森から津軽半島東岸を北上。二時間ほどで蟹田に着いた。ここは蟹の名産地、中学時代の唯一の友人N君宅で歓待を受けた。事前に「リング酒と蟹だけで、あとはくれぐれもおかまいなく」と書いたが、N君は、あいつがビールと酒が嫌いになるはずはない、柄にもなく遠慮している、とすべてお見通しだ。N君とは一緒に登校したり、日曜に近くの山に遊びに行ったりした仲だ。二人とも相前後して上京し、交遊は続いた。彼はなにせ鷹揚な性質で、いくらだまされてもいよいよのんきに明

るくなっていく不思議な男だ。実家の精米業を継ぐため帰郷しても、不思議な人徳で信頼されて、今や町会議員もやり蟹田になくはならぬ存在となっている。そのN君の昔からの親友というだけで皆、多少の親しみを感じてくれて、盃の献酬をしている。私は東京の言葉は使わず、努めて純粹の津軽弁を話した。この旅は、都会人としての私に不安を感じて、津軽人としての私をつかむためである。顔役が帰ったあとも飲み続けたが、鶏が鳴いたので引き揚げた。

翌日、青森のT君が来てくれた。彼が連れてきた何人かとも一緒に、かんらんざん観瀾山に登った。高さ百メートルの小山ながら、見晴らしは悪くなかった。はるか先まで遠望できた。桜の下で、N君の奥さんによる重箱の料理でビールを飲んだ。が、そこで自戒していたにもかかわらず、集まった皆が好きだという文壇で畏敬される先輩作家の悪口をまくしたててしまった。

蟹田分院の事務長のSさんのとりなしで、蟹田町で一番大きい旅館にまた上等な酒を飲んだ。Sさんは、小説家が大好きで、子供を文男と名付けたくらいである。

やがて、自分の家に来てくれとしきりに誘い、リンゴ酒で誘惑する。私は不安だったが、行ったらそのとたん熱狂的な歓待だった。酒だ料理だ、音楽だ、と矢継ぎ早の指示を飛ばし、疾風怒濤の如き接待だった。これが津軽人の愛情表現だ。私も似たところがある。

翌日、一仕事のあと、津軽の郷土の悲惨な凶作の歴史の記録を見て、感慨に耽った。その翌日、N君の案内で北上し、義経伝説で知られる三厩みんまやで一泊した。宿で、途中で買った鯛をそのままの形で塩焼きにするよう頼んだが、五つに切って出してきた無神経さに、地団駄踏む思いであった。翌日、竜飛崎に向かったが、近づくにつれ風景は異様にすごくなってきた。点景人物の存在を許さなただ岩石と水ばかりの光景はおそろしく、言葉もない。竜飛の宿では、お婆さんが配給の酒を集めてくれて飲んだが、またたく間になくなった。N君の歌声の蛮声に驚いたらしい婆さんにさっさと寝かされてしまった。

青森に戻り、津軽平野を北上して、生家のある金木に着いた。まず仏間で拝んだ

のち、嫂に改めて挨拶した。二階で飲んでいる長兄、次兄、長兄の娘のお婿さんらのところに上がり、無沙汰を詫びた。長兄も次兄も、あ、と言ってちよつと首肯いたきりだった。それがわが家の流儀であり、津軽の流儀だ。兄たちはお互いに、さ、どうぞ、いえいけません、と譲り合っている。まるで龍宮か何かの別天地のようで、荒っぽく飲んできた私の生活の雰囲気との差異には愕然とした。生家では気疲れする。私が後でこうして書くからいけないのだ。

翌日、姪とその婿さんらと弁当を持って小山に遊びに行った。津軽富士の岩木山が素晴らしく、眼前に展開する春の津軽平野の風景にはうっとりしてしまった。生家に三日滞在したのち、父の生まれた木造に向かった。父の生家の薬問屋に思い切っって入ったら、たちまち床の間に座らされ、酒がでてきて歓待された。金木の家を、生家と同じ間取りに改築した養子の父の「人間」に触れたような気がして、立ち寄った甲斐があつたと思つた。

引き留められるのを何とか辞去し、深浦に向かった。最後の目的地は、子守とし

て三歳から八歳まで育ててくれた越野たけのいる小泊である。たけは当時十四歳だった。一日一本のバスで何とか着いたものの名前だけが頼りだ。たけの家はみつかったが、ガラス戸が固くしまっている。煙草屋に聞いたら、たけは娘と運動会に行っているという。運動会に行き、誰かれにたけはいないか聞いたが、みつからない。あきらめて、一本のみの一時半のバスで帰ろうと決めた。今生の別れのつもりでたけの家の前までまた来たところ、戸が二三寸開いている。天の助け！たけの娘だった。その案内で運動会に行き、ひとつの掛小屋に来た。中からたけが出てきた。「あらあ」とそれだけで笑いもしない。小屋に招じ入れられ、座らせられたが、たけは何も言わずに子供が走るのを見ている。私は安心してしまった。やがて、たけは、龍神様の桜を見に行くか、と誘った。砂山を登りきって、八重桜の小枝を折とって、花をむしって向き直ると、にわかにな弁になった。矢継ぎ早に質問をする。たけのそのような無遠慮な愛情のあらわし方を見て、私はたけに似ていると思つた。そして兄弟の中で一人粗野でがらっぱちな私の育ちの本質をはっきり知らされた。私の

忘れ得ぬ人は、青森の「君」であり、五所川原の中畑さんであり、金木のアヤであり、そして小泊のたけである。その昔、一度は私の家にいたことがある人で、私はこれらの人と友である。

### ●序編冒頭部分

或るとしの春、私は、生れてはじめて本州北端、津軽半島を凡そ三週間ほどかかって一周したのであるが、それは、私の三十幾年の生涯に於いて、かなり重要な事件の一つであった。私は津軽に生れ、さうして二十年間、津軽に於いて育ちながら、金木、五所川原、青森、弘前、浅虫、大鰐、それだけの町を見ただけで、その他の町村に就いては少しも知るところが無かつたのである。

金木は、私の生れた町である。津軽平野のほぼ中央に位し、人口五、六千の、これといふ特徴もないが、どこやら都会ふうにちよつと気取った町である。善く言へば、水のやうに淡泊であり、悪く言へば、底の浅い見栄坊の町といふ事になつてゐるやうである。それから三里ほど南下し、岩木川に沿うて五所川原といふ町が在る。この地方の産物の集散地で人口も一万以上あるやうだ。青森、弘前の両市を除いて、人口一万以上の町は、この辺には他に無い。善く言へば、活気のある町であり、悪

く言へば、さわがしい町である。農村の匂ひは無く、都会特有の、あの孤独の戦慄がこれくらゐの小さい町にも既に幽かに忍びいつてゐる模様である。大袈裟な譬喩でわれながら閉口して申し上げるのであるが、かりに東京に例をとるならば、金木は小石川であり、五所川原は浅草、といったやうなところでもあらうか。ここには、私の叔母がある。幼少の頃、私は生みの母よりも、この叔母を慕つてゐたので、實にしばしばこの五所川原の叔母の家へ遊びに来た。私は、中学校にはひるまでは、この五所川原と金木と、二つの町の他は、津軽の町に就いて、ほとんど何も知らなかつたと言つてよい。やがて、青森の中学校に入学試験を受けに行く時、それは、わづか三、四時間の旅であつた筈なのに、私にとっては非常な大旅行の感じで、その時の興奮を私は少し脚色して小説にも書いた事があつて、その描写は必ずしも事實そのままではなく、かなしいお道化の虚構に満ちてはゐるが、けれども、感じは、だいたいあんなものだつたと思つてゐる。

### ●本編冒頭部分

#### 一 巡礼

「ね、なぜ旅に出るの？」

「苦しいからさ。」

「あなたの（苦しい）は、おきまりで、ちつとも信用できません。」

「正岡子規三十六、尾崎紅葉三十七、斎藤緑雨三十八、国木田独歩三十八、長塚節三十七、芥川龍之介三十六、嘉村礒多三十七。」

「それは、何の事なの？」

「あいつらの死んだとき。ばたばた死んでゐる。おれもそろそろ、そのとした。作家にとつて、これくらゐの年齢の時が、一ばん大事で、」

「さうして、苦しい時なの？」

「何を言つてやがる。ふざけちやいけない。お前にだつて、少しは、わかつてゐる筈だがね。もう、これ以上は言はん。言ふと、氣障きざんになる。おい、おれは旅に出るよ。」

私もいい加減にとしをとつたせみか、自分の氣持の説明などは、氣障きざんな事のやうに思はれて、(しかも、それは、たいていありふれた文学的な虚飾なのだから)何も言ひたくないのである。

津輕の事を書いてみないか、と或る出版社の親しい編輯者に前から言はれてゐたし、私も生きてゐるうちに、いちど、自分の生れた地方の隅々まで見て置きたくて、或る年の春、乞食のやうな姿で東京を出發した。

### ●ハイライト場面①

蟹田での親友N君と二十年ぶりの旧交を温める。

## 二 蟹田

(中略)

蟹田のN君の家では、赤い猫脚の大きいお膳に蟹を小山のやうに積み上げて私を待ち受けてくれてゐた。

「リング酒でなくちやいけないかね。日本酒も、ビールも駄目かね。」と、N君は、言ひにくさうにして言ふのである。

駄目どころか、それはリング酒よりにきまつてゐるのであるが、しかし、日本酒やビールの貴重な事は「大人おとな」の私は知つてゐるので、遠慮して、リング酒と手紙に書いたのである。津輕地方には、このごろ、甲州に於ける葡萄酒のやうに、リング酒が割合ひ豊富だといふ噂を聞いてゐたのだ。

「それあ、どちらでも。」私は複雑な微笑をもらした。

N君は、ほつとした面持で、

「いや、それを聞いて安心した。僕は、どうも、リング酒は好きぢやないんだ。実はね、女房の奴が、君の手紙を見て、これは太宰が東京で日本酒やビールを飲みあ

きて、故郷の匂ひのするリンゴ酒を一つ飲んでみたくて、かう手紙にも書いてゐるのに相違ないから、リンゴ酒を出しませうと言ふのだが、僕はそんな筈は無い、あいつがビールや日本酒をきらひになつた筈は無い、あいつは、がらにも無く遠慮をしてみゐるのに違ひないと言つたんだ。」

「でも、奥さんの言も当つてゐない事はないんだ。」

「何を言つてる。もう、よせ。日本酒をさきにしますか？　ビール？」

「ビールは、あとのほうがいい。」私も少し図々しくなつて来た。

「僕もそのほうがいい。おうい、お酒だ。お燗がぬるくてもかまはないから、すぐ持つて来てくれ。」

何れの処か酒を忘れ難き。天涯旧情を話す。

青雲俱に達せず、白髮通に相驚く。

二十年前に別れ、三千里外に行く。

此時一盞無くんば、何を以てか平生を叙せん。

(白居易)

(中略)

顔役のお客さんたちが帰つてしまふと、私とN君は奥の座敷から茶の間へ酒席を移して、アトフキをはじめた。アトフキといふのは、この津軽地方に於いて、祝言か何か家に人寄せがあつた場合、お客が皆かへつた後で、身内の少数の者だけが、その残肴を集めてささやかにひらく慰勞の宴の事であつて、或いは「後引き」の訛かも知れない。N君は私よりも更にアルコールには強いたちなので、私たちは共に、乱に及ぶ憂ひは無かつたが、

「しかし、君も、」と私は、深い溜息をついて、「相変らず、飲むなあ。何せ僕の先生なんだから、無理もないけど。」

僕に酒を教へたのは、実に、このN君なのである。それは、たしかに、さうなのである。

「うむ。」とN君は盃を手にしたままで、真面目に首肯き、「僕だつて、ずいぶんその事に就いては考へてゐるんだぜ。君が酒で何か失敗みたいな事をやらかすたんびに、僕は責任を感じて、つらかつたよ。でもね、このごろは、かう考へ直さうと努めてゐるんだ。あいつは、僕が教へなかつたつて、ひとりで、酒飲みになつた奴に違ひない。僕の知つた事ではないと。」

「ああ、さうなんだ。そのとほりなんだ。君に責任なんかありやしないよ。全く、そのとほりなんだ。」

やがて奥さんも加り、お互ひの子供の事など語り合つて、しんみり、アトフキをやつてゐるうちに、突如、鶏鳴あかつきを告げたので、大いに驚いて私は寢所へ引上げた。

## ●ハイライト場面②

観瀾山での志賀直哉談義

くわんらんざん  
観瀾山。私はれいのむらさきのジャンパーを着て、緑色のゲートルをつけて出掛けたのであるが、そのやうなものしい身支度をする必要は全然なかつた。その山は、蟹田の町はづれにあつて、高さが百メートルも無いほどの小山なのである。けれども、この山からの見はらしは、悪くなかつた。その日は、まぶしいくらゐの上天気で、風は少しも無く、青森湾の向うに夏泊岬が見え、また、平館海峡をへだてて下北半島が、すぐ真近かに見えた。東北の海と言へば、南方の人たちは或いは、どす暗く険悪で、怒濤逆巻く海を想像するかも知れないが、この蟹田あたりの海は、ひどく温和でさうして水の色も淡く、塩分も薄いやうに感ぜられ、磯の香さへほのかである。雪の溶け込んだ海である。ほとんどそれは湖水に似てゐる。深さなどに就いては、国防上、言はぬほうがいいかも知れないが、浪は優しく砂浜を蹴つてゐる。さうして海浜のすぐ近くに網がいくつも立てられてゐて、蟹をはじめ、イカ、カレヒ、サバ、イワシ、鱈、アンカウ、さまざまの魚が四季を通じて容易に捕獲できざる様子である。

(中略)

観瀾山から見下すと、水量たつぷりの蟹田川が長蛇の如くうねって、その両側に一番打のすんだ水田が落ちつき払って控へてゐて、ゆたかな、たのもしい景観をなしてゐる。山は奥羽山脈の支脈の梵珠山脈ほんじゆさんみやくである。この山脈は津軽半島の根元から起つてまっすぐに北進して半島の突端の竜飛岬まで走つて海にころげ落ちる。二百メートルから三、四百メートルくらゐの低い山々が並んで、観瀾山からほぼまっすぐ西に青く聳えてゐる大倉岳は、この山脈に於いて増川岳などと共に最高の山の一つなのであるが、それとて、七百メートルあるかないかくらゐのものなのである。けれども、山高きが故に貴からず、樹木あるが故に貴し、とか、いやに興覚めなハツキリした事を断言してはばからぬ実利主義者もあるのだから、津軽の人たちは、敢へてその山脈の低きを恥ぢる必要もあるまい。

19

(中略)

その日、蟹田の観瀾山で一緒にビールを飲んだ人たちも、たいていその五十年配の作家の心酔者らしく、私に対して、その作家の事ばかり質問するので、たうとう私も芭蕉翁の行脚の掟を破つて、そのやうな悪口を言ひ、言ひはじめたら次第に興奮して来て、それこそ眉をはね上げ口を曲げる結果になつて、貴族的なんて、へんなどころで脱線してしまつた。一座の人たちは、私の話に少しも同感の色を示さなかつた。「貴族的なんて、そんな馬鹿な事を私たちは言つてはゐません。」と今別から来たMさんは、当惑の面持で、ひとりごとのやうにして言つた。酔漢の放言に閉口し切つてゐるといふやうなふうに見えた。他の人たちも、互ひに顔を見合せてにやにや笑つてゐる。

20

「要するに、」私の声は悲鳴に似てゐた。ああ、先輩作家の悪口は言ふものでない。「男振りにだまされちやいかんといふ事だ。ルイ十六世は、史上まれに見る醜男だつたんだ。」いよいよ脱線するばかりである。

「でも、あの人の作品は、私は好きです。」とMさんは、イヤにはつきり宣言する。「日本ぢや、あの人の作品など、いいはうなんでせう？」と青森の病院のHさんは、つつましく、取りなし顔に言ふ。

私の立場は、いけなくなるばかりだ。

「そりや、いいはうかも知れない。まあ、いいはうだらう。しかし、君たちは、僕を前に置きながら、僕の作品に就いて一言も言ってくれないのは、ひどいぢやないか。」私は笑ひながら本音を吐いた。

みんな微笑した。やはり、本音を吐くに限る、と私は図に乗り、

「僕の作品なんかは、滅茶苦茶だけれど、しかし僕は、大望を抱いてゐるんだ。その大望が重すぎて、よろめいてゐるのが僕の現在のこの姿だ。君たちには、だらしない無智な薄汚い姿に見えるだらうが、しかし僕は本当の気品といふものを知つてゐる。松葉の形の干菓子ひがしを出したり、青磁の壺に水仙を投げ入れて見せたつて、僕はちつともそれを上品だとは思はない。成金趣味だよ、失敬だよ。本当の気品と

いふものは、真黒いどつしりした大きい岩に白菊一輪だ。土台に、おさい大きい岩が無くちや駄目なもんだ。それが本当の上品といふものだ。君たちなんか、まだ若いから、針金で支へられたカーネーションをコップに投げ入れたみたいな女学生くさいリリズムを、芸術の気品だなんて思つてあやがる。」

暴言であつた。「他の短を挙げて、己が長を顕すことなけれ。人を譏りておのれに誇るは甚だいやし。」この翁の行脚の掟は、嚴肅の真理に似てゐる。じつさい、甚だいやしいものだ。私にはこのいやしい悪癖があるので、東京の文壇に於いても、皆に不愉快の感を与へ、薄汚い馬鹿者として遠ざけられてゐるのである。「まあ、仕様が無いや。」と私は、うしろに両手をつけて仰向き、「僕の作品なんか、まつたく、ひどいんだからな。何を言つたつて、はじまらん。でも、君たちの好きなその作家の十分の一くらゐは、僕の仕事をみとめてくれてもいいぢやないか。君たちは、僕の仕事をさつぱりみとめてくれないから、僕だつて、あらぬ事を口走りたくなくなつて来るんだ。みとめてくれよ。二十分の一でもいいんだ。みとめろよ。」

みんな、ひどく笑った。笑はれて、私も、氣持がたすかった。

### ●ハイライト場面③

津軽人の疾風怒濤の如き接待振り

Sさんのお家へ行つて、その津軽人の本性を暴露した熱狂的な接待振りには、同じ津軽人の私でさへ少しめんくらつた。Sさんは、お家へはひるなり、たてつづけに奥さんに用事を言ひつけるのである。「おい、東京のお客さんを連れて来たぞ。たうとう連れて来たぞ。これが、そのれいの太宰つて人なんだ。挨拶をせんかい。早く出て来て拜んだらよからう。ついでに、酒だ。いや、酒はもう飲んぢやつたんだ。リンゴ酒を持つて来い。なんだ、一升しか無いのか。少い！もう二升買つて来い。待て。その縁側にかけてある干鱈ひだらをむしつて、待て、それは金槌かなづちでたたいてやはらかくしてから、むしらなくちや駄目なものなんだ。待て、そんな手つきぢやいけない、僕がやる。干鱈をたたくには、こんな工合ひに、こんな工合ひに、あ、痛え、

まあ、こんな工合ひだ。おい、醤油を持つて来い。干鱈には醤油をつけなくちや駄目だ。コツプが一つ、いや二つ足りない。早く持つて来い、待て、この茶飲茶碗でもいいか。さあ、乾盃、乾盃。おうい、もう二升買つて来い、待て、坊やを連れて来い。小説家になれるかどうか、太宰に見てもらふんだ。どうです、この頭の形は、こんなのを、鉢がひらいてゐるといふんでせう。あなたの頭の形に似てゐると思ふんですがね。しめたものです。おい、坊やをあつちへ連れて行け。うるさくてかなはない。お客さんの前に、こんな汚い子を連れて来るなんて、失敬ぢやないか。成金趣味だぞ。早くリンゴ酒を、もう二升。お客さんが逃げてしまふぢやないか。待て、お前はここにおてサアヴィスをしろ。さあ、みんなにお酌。リンゴ酒は隣りのをばさんに頼んで買つて来てもらへ。をばさんは、砂糖をほしがつてゐたから少しわけてやれ。待て、をばさんにやつちやいかん。東京のお客さんに、うちの砂糖全部お土産に差し上げる。いいか、忘れぢやいけないよ。全部、差し上げる。新聞紙で包んでそれから油紙で包んで紐でゆはへて差し上げる。子供を泣かせぢや、いか

ん。失敬ぢやないか。成金趣味だぞ。貴族つてのはそんなものぢやないんだ。待て。砂糖はお客さんがお帰りの時でいいんだつてば。音楽、音楽。レコードをはじめろ。シユーベルト、シヨパン、バツハ、なんでもいい。音楽を始めろ。待て。なんだ、それは、バツハか。やめろ。うるさくてかなはん。話も何も出来やしない。もつと静かなレコードを掛ける、待て、食ふものが無くなつた。アンコーのフライを作れ。ソースがわが家の自慢と来てゐる。果してお客さんのお気に召すかどうか、待て、アンコーのフライとそれから、卵味噌のカヤキを差し上げる。これは津軽で無ければ食へないものだ。さうだ。卵味噌だ。卵味噌に限る。卵味噌だ。卵味噌だ。」

私は決して誇張法を用ひて描写してゐるのではない。この疾風怒濤の如き接待は、津軽人の愛情の表現なのである。

(中略)

その日のSさんの接待こそ、津軽人の愛情の表現なのである。しかも、生粹きっすいの津

軽人のそれである。これは私に於いても、Sさんと全く同様な事がしばしばあるので、遠慮なく言ふ事が出来るのであるが、友あり遠方より来た場合には、どうしたらいいかわからなくなつてしまふのである。ただ胸がわくわくして意味も無く右往左往し、さうして電燈に頭をぶつけて電燈の笠を割つたりなどした経験さへ私にはある。食事中に珍客があらはれた場合に、私はすぐに箸を投げ出し、口をもぐもぐさせながら玄関に出るので、かへつてお客に顔をしかめられる事がある。お客を待たせて、心静かに食事をつづけるなどといふ芸当は私には出来ないのである。さうしてSさんの如く、実質に於いては、到れりつくせりの心づかひをして、さうして何やらかやら、家中のもの一切合切持ち出して饗応しても、ただ、お客に閉口させるだけの結果になつて、かへつて後でそのお客に自分の非礼をお詫びしなければならぬなどといふ事になるのである。ちぎつては投げ、おしつては投げ、取つて投げ、果ては自分の命までも、といふ愛情の表現は、関東、関西の人たちにはかへつて無礼な暴力的なものやうに思はれ、つひには敬遠といふ事になるのではあるまいか、

と私はSさんに依つて私自身の宿命を知らされたやうな気がして、帰る途々、Sさんがなつかしく気の毒でならなかつた。津軽人の愛情の表現は、少し水で薄めて服用しなければ、他国の人には無理なところがあるかも知れない。東京の人は、ただ妙にもつたいぶつて、チョツピリづつ料理を出すからなあ。ぶえんの平茸ひらたけではないけれど、私も木曾殿みたい、この愛情の過度の露出のゆゑに、どんなにいままで東京の高慢な風流人たちに蔑視せられて来た事か。「かい給へ、かい給へや。」とぞ責めたりける、である。

後で聞いたが、Sさんはそれから一週間、その日の卵味噌の事を思ひ出すと恥づかしくて酒を飲まずには居られなかつたといふ。ふだんは人一倍はにかみやの、神経の繊細な人らしい。これもまた津軽人の特徴である。生粋の津軽人といふものは、ふだんは、決して粗野な野蛮人ではない。なまなかの都会人よりも、はるかに優雅な、こまかい思ひやりを持つてゐる。その抑制が、事情に依つて、どつと堰を破つて奔騰する時、どうしたらいいかわからなくなつて、「ぶえんの平茸ここにあり、と

うとう。」といそがす形になつてしまつて、軽薄の都会人に颯感せられるくやしい結果になるのである。Sさんはその翌日、小さくなつて酒を飲み、そこへ一友人がたづねて行つて、

「どう？ あれから奥さんに叱られたでせう？」と笑ひながら尋ねたら、Sさんは、処女の如くはにかんで、「いいえ、まだ。」と答へたといふ。

叱られるつもりであるらしい。

#### ●ハイライト場面④——本州最果ての地の竜飛崎の凄愴な光景

### 三 外ヶ浜

(中略)

二時間ほど歩いた頃から、あたりの風景は何だか異様に凄くなつて来た。凄愴とでもいふ感じである。それは、もはや、風景でなかつた。風景といふものは、永い

年月、いろんな人から眺められ形容せられ、謂はば、人間の眼で舐められて軟化し、人間に飼はれてなつてしまつて、高さ三十五丈の華巖の滝にでも、やつぱり檻の中の猛獣のやうな、人くさい匂ひが幽かに感ぜられる。昔から絵にかかれ歌によまれ俳句に吟ぜられた名所難所には、すべて例外なく、人間の表情が発見せられるのだが、この本州北端の海岸は、てんで、風景にも何も、なつてやしない。点景人物の存在もゆるさない。強ひて、点景人物を置かうとすれば、白いアツシを着たアイヌの老人でも借りて来なければならぬ。むらさきのジャンパーを着たにやけ男などは、一も二も無くはねかへされてしまふ。絵にも歌にもなりやしない。ただ岩石と、水である。ゴンチャロフであつたか、大洋を航海して時化しけに遭つた時、老練の船長が、「まあちよつと甲板に出てごらんさい。この大きい波を何と形容したらいいのでせう。あなたがた文学者は、きつとこの波に対して、素晴らしい形容詞を与へて下さるに違ひない。」ゴンチャロフは、波を見つめてやがて、溜息をつき、ただ一言、「おそろしい。」

大洋の激浪や、砂漠の暴風に対しては、どんな文学的な形容詞も思ひ浮ばないのと同様に、この本州の路のきはまるところの岩石や水も、ただ、おそろしいばかりで、私はそれらから眼をそらして、ただ自分の足もとばかり見て歩いた。もう三十分くらゐで竜飛に着くといふ頃に、私は幽かに笑ひ、

「こりやどうも、やつぱりお酒を残して置いたはうがよかつたね。竜飛の宿に、お酒があるとは思へないし、どうもかう寒くてはね。」と思はず愚痴をこぼした。

「いや、僕もいまその事を考へてみたんだ。もう少し行くと、僕の昔の知合ひの家があるんだが、ひよつとするとそこに配給のお酒があるかも知れない。そこは、お酒を飲まない家なんだ。」

「当つてみてくれ。」

「うん、やつぱり酒が無くちやいけない。」

竜飛の一つ手前の部落に、その知合ひの家があつた。N君は帽子を脱いでその家へはひり、しばらくして、笑ひを噛み殺してあるやうな顔をして出て来て、

「悪運つよし。水筒に一ぱいつめてもらつて来た。五合以上はある。」

「燠おきが残つてみたわけだ。行かう。」

もう少しだ。私たちは腰を曲げて烈風に抗し、小走りに走るやうにして竜飛に向つて突進した。路がいよいよ狭くなつたと思つてゐるうちに、不意に、鶏小舎に頭を突込んだ。一瞬、私は何が何やら、わけがわからなかつた。

「竜飛だ。」とN君が、変つた調子で言つた。

「ここが？」落ちついて見廻すと、鶏小舎と感じたのが、すなはち竜飛の部落なのである。兇暴の風雨に対して、小さい家々が、ひしとひとかたまりになつて互ひに庇護し合つて立つてゐるのである。ここは、本州の極地である。この部落を過ぎて路は無い。あとは海にころげ落ちるばかりだ。路が全く絶えてゐるのである。ここは、本州の袋小路だ。読者も銘肌せよ。諸君が北に向つて歩いてゐる時、その路をどこまでも、さかのぼり、さかのぼり行けば、必ずこの外ヶ浜街道に到り、路がいよいよ狭くなり、さらにさかのぼれば、すぼりとこの鶏小舎に似た不思議な世界に

落ち込み、そこに於いて諸君の路は全く尽きるのである。

「誰だつて驚くよ。僕もね、はじめてここへ来た時、や、これはよその台所へはひつてしまつた、と思つてひやりとしたからね。」とN君も言つてゐた。

けれども、ここは国防上、ずいぶん重要な土地である。私はこの部落に就いて、これ以上語る事は避けなければならぬ。露路をとほつて私たちは旅館に着いた。お婆さんが出て来て、私たちを部屋に案内した。この旅館の部屋もまた、おや、と眼をみはるほど小綺麗で、さうして普請も決して薄つぺらでない。まづ、どてらに着換へて、私たちは小さい囲炉裏を挟んであぐらをかいて坐り、やつと、どうやら、人心地を取かへした。

「ええと、お酒はありますか。」N君は、思慮分別ありげな落ちついた口調で婆さんに尋ねた。答へは、案外であつた。

「へえ、ございます。」おもながの、上品な婆さんである。さう答へて、平然として

みる。N君は苦笑して、

「いや、おばあさん。僕たちは少し多く飲みたいんだ。」

「どうぞ、ナンボでも。」と言って微笑んでゐる。

私たちは顔を見合せた。このお婆さんは、このごろお酒が貴重品になつてゐるといふ事実を、知らないのではなからうかとさへ疑はれた。

「けふ配給がありましてな、近所に、飲まないところもかなりありますから、そんなのを集めて、」と言って、集めるやうな手つきをして、それから一升瓶をたくさんかかへるやうに腕をひろげて、「さつき内の者が、こんなに一ぱい持つてまゐりました。」

「それくらゐあれば、たくさんだ。」と私は、やつと安心して、「この鉄瓶でお燗をしますから、お銚子にお酒をいれて、四、五本、いや、めんだうくさい、六本、すぐに持つて来て下さい。」お婆さんの氣の変らぬうちに、たくさん取寄せて置いたはうがいいと思つた。「お膳は、あとでもいいから。」

お婆さんは、言はれたとほりに、お盆へ、お銚子を六本載せて持つて来た。一、二本、飲んでゐるうちにお膳も出た。

「どうぞ、まあ、ごゆつくり。」

「ありがたう。」

六本のお酒が、またたく間に無くなつた。

「もう無くなつた。」私は驚いた。「ばかに早いね。早すぎるよ。」

「そんなに飲んだかね。」とN君も、いぶかしさうな顔をして、からのお銚子を一本づつ振つて見て、「無い。何せ寒かつたもので、無我夢中で飲んだらしいね。」

「どのお銚子にも、こぼれるくらゐ一ぱいお酒がはひつてゐただぜ。こんなに早く飲んでしまつて、もう六本なんて言つたら、お婆さんは僕たちを化物ぢやないかと思つて警戒するかも知れない。つまりぬ恐怖心を起させて、もうお酒はかんべんして下さいなど言はれてもいけないから、ここは、持参の酒をお燗して飲んで、少し間まをもたせて、それから、もう六本ばかりと言つたはうがよい。今夜は、この

本州の北端の宿で、一つ飲み明かさうぢやないか。」と、へんな策略を案出したのが失敗の基であつた。

私たちは、水筒のお酒をお銚子に移して、こんどは出来るだけゆつくり飲んだ。そのうちにN君は、急に酔つて来た。

「こりやいかん。今夜は僕は酔ふかも知れない。」酔ふかも知れないぢやない。既にひどく酔つてしまつた様子である。「こりや、いかん。今夜は、僕は酔ふぞ。いいか。酔つてもいいか。」

「かまはないとも。僕も今夜は酔ふつもりだ。ま、ゆつくりやらう。」

「歌を一つやらかさうか。僕の歌は、君、聞いた事が無いだらう。めつたにやらないんだ。でも、今夜は一つ歌ひたい。ね、君、歌つてもいいたらう。」

「仕方がない。拜聴しよう。」私は覚悟をきめた。

いくう、山河あ、と、れいの牧水の旅の歌を、N君は眼をつぶつて低く吟じはじめた。想像してゐたほどは、ひどくない。黙つて聞いてみると、身にしみるものが

あつた。

「どう？　へんかね。」

「いや、ちよつと、ほろりとした。」

「それぢや、もう一つ。」

こんどは、ひどかつた。彼も本州の北端の宿へ来て、気宇が広大になつたのか、仰天するほどのおそろしい蛮声を張り上げた。

とうかいのう、小島のう、磯のう、と、啄木の歌をはじめたのだが、その声の荒々しく大きい事、外の風の音も、彼の声のために打消されてしまつたほどであつた。

「ひどいなあ。」と言つたら、

「ひどいか。それぢや、やり直し。」大きく深呼吸を一つして、さらに蛮声を張り上げるのである。東海の磯の小島、と間違つて歌つたり、また、どういふわけか突如として、今もまた昔を書けば増鏡、なんて増鏡の歌が出たり、呻くが如く、喚くが如く、おらぶが如く、実にまづい事になつてしまつた。私は、奥のお婆さんに聞え

なければいいが、とはらはらしてゐたのだが、果せる哉、襖がすつとあいて、お婆さんが出て来て、

「さ、歌コも出たやうだし、そろそろ、お休みになりせえ。」と言つて、お膳をさげ、さつさと蒲団をひいてしまった。さすがに、N君の氣宇広大の蛮声には、度胆を抜かれたものらしい。私はまだまだ、これから、大いに飲まうと思つてゐたのに、実に、馬鹿らしい事になつてしまった。

「まづかつた。歌は、まづかつた。一つか二つでよせばよかつたのだ。あれぢやあ、誰だつておどろくよ。」と私は、ぶつぶつ不平を言ひながら、泣寝入りの形であつた。

翌る朝、私は寢床の中で、童女のいい歌声を聞いた。翌る日は風もをさまり、部屋には朝日がさし込んでゐて、童女が表の路で手毬歌を歌つてゐるのである。私は、頭をもたげて、耳をすました。

せつせつせ

夏もちかづく

八十八夜

野にも山にも

新緑の

風に藤波

さわぐ時

私は、たまらない氣持になつた。いまでも中央の人たちに蝦夷の土地と思ひ込まれて輕蔑されてゐる本州の北端で、このやうな美しい発音の爽やかな歌を聞かうとは思はなかつた。かの佐藤理学士の言説の如く、「人もし現代の奥州に就いて語らんと欲すれば、まづ文芸復興直前のイタリヤに於いて見受けられたあの鬱勃たる擡頭力を、この奥州の地に認めなければならぬ。文化に於いて、はたまた産業に於いて然り、かしくも明治大帝の教育に関する大御心はまことに神速に奥州の津々浦々にまで浸透して、奥州人特有の聞きぐるしき鼻音の減退と標準語の進出とを促し、嘗ての原始的狀態に沈淪した蒙昧な蛮族の居住地に教化の御光を与へ、而して、い

まや見よ云々。」といふやうな、希望に満ちた曙光に似たものを、その可憐な童女の歌声に感じて、私はたまらない気持であつた。

#### ●ハイライト場面⑤

金木の生家で兄たちとの再会して気疲れ。

#### 四 津軽平野

(中略)

その翌々日の昼頃、私は定期船でひとり蟹田を発ち、青森の港に着いたのは午後  
の三時、それから奥羽線で川部まで行き、川部で五能線に乗りかへて五時頃五所川  
原に着き、それからすぐ津軽鉄道で津軽平野を北上し、私の生れた土地の金木町に  
着いた時には、もう薄暗くなつてゐた。蟹田と金木と相隔たる事、四角形の一边に  
過ぎないのだが、その間に梵珠山脈があつて山中には路らしい路も無いやうな有様  
らしいので、仕方なく四角形の他の三辺を大迂回して行かなければならぬのである。

金木の生家に着いて、まづ仏間へ行き、嫂がついて来て仏間の扉を一ぱいに開いて  
くれて、私は仏壇の中の父母の写真をしばらく眺め、ていねいにお辞儀をした。そ  
れから、常居じよゐといふ家族の居間にさがつて、改めて嫂に挨拶した。

「いつ、東京を？」と嫂は聞いた。

私は東京を出発する数日前、こんど津軽地方を一周してみたいと思つてゐますが、  
ついでに金木にも立寄り、父母の墓参をさせていただきたいと思つてゐますから、  
その折にはよろしく願ひします、といふやうな葉書を嫂に差上げてゐたのである。  
「一週間ほど前です。東海岸で、手間どつてしまひました。蟹田のN君には、ずい  
ぶんお世話になりました。」N君の事は、嫂も知つてゐる筈だつた。

「さう。こちらではまた、お葉書が来ても、なかなかご本人がお見えにならないの  
で、どうしたのかと心配してゐました。陽子や光みつちゃんなどは、とても待つて、毎  
日交代に停車場へ出張してゐたのですよ。おしまひには、怒つて、もう来たつて知  
らない、と言つてゐた人もありました。」

陽子といふのは長兄の長女で、半年ほど前に弘前の近くの地主の家へお嫁に行き、その新郎と一緒にちよいちよい金木へ遊びに来るらしく、その時もお二人でやつて来てゐたのである。光ちゃんといふのは、私たちの一ばん上の姉の末娘で、まだ嫁が金木の家へいつも手伝ひに来てゐる素直な子である。その二人の姪が、からみ合ひながら、えへへ、なんておどけた笑ひ方をして出て来て、酒飲みのだらしない叔父さんに挨拶した。陽子は女学生みたいで、まだ少しも奥さんらしくない。

「をかしい恰好。」と私の服装をすぐに笑つた。

「ばか。これが、東京のはやりさ。」

嫂に手をひかれて、祖母も出て来た。八十八歳である。

「よく来た。ああ、よく来た。」と大声で言ふ。元気な人だつたが、でも、さすがに少し弱つて来てゐるやうにも見えた。

「どうしますか。」と嫂は私に向つて、「ごはんは、ここで食べますか。二階に、みなゐるんですけど。」

陽子のお婿さんを中心に、長兄や次兄が二階で飲みはじめてゐる様子である。

兄弟の間では、どの程度に礼儀を保ち、またどれくらゐ打ち解けて無遠慮にしたらしいものか、私にはまだよくわかつてゐない。

「お差支へなかつたら、二階へ行きませうか。」ここでひとりで、ビールなど飲んでゐるのも、いぢけてゐるみたいで、いやらしい事だと思つた。

「どちらだつて、かまひませんよ。」嫂は笑ひながら、「それぢや、二階へお膳を。」と光ちゃんたちに言ひつけた。

私はジャンパー姿のまま二階に上つて行つた。金襴の一ばんいい日本間で、兄たちは、ひっそりお酒を飲んでゐた。私はどたばたとばかり、  
「修治です。はじめて。」と言つて、まづお婿さんに挨拶して、それから長兄と次兄に、ごぶさたのお詫びをした。長兄も次兄も、あ、と言つて、ちよつと首肯いたきりだつた。わが家の流儀である。いや、津軽の流儀と言つていいかも知れない。私は慣れてゐるので平氣でお膳について、光ちゃんと嫂のお酌で、黙つてお酒を飲ん

でゐた。お婿さんは、床柱をうしろにして坐つて、もうだいぶお顔が赤くなつてゐる。兄たちも、昔はお酒に強かつたやうだが、このごろは、めつきり弱くなつたやうで、さ、どうぞ、もうひとつ、いいえ、いけません、そちらさんこそ、どうぞ、などと上品にお互ひゆづり合つてゐる。外ヶ浜で荒つぽく飲んで来た私には、まるで竜宮か何か別天地のやうで、兄たちと私の生活の雰囲気の違いに今更のごとく愕然とし、緊張した。

「蟹は、どうしませう。あとで？」と嫂は小声で私に言つた。私は蟹田の蟹を少しお土産に持つて来たのだ。

「さあ。」蟹といふものは、どうも野趣がありすぎて上品のお膳をいやしくする傾きがあるので私はちよつと躊躇した。嫂も同じ氣持だつたのかも知れない。

「蟹？」と長兄は聞きとがめて、「かまひませんよ。持つて来なさい。ナプキンも一緒に。」

今夜は、長兄もお婿さんがゐるせゐか、機嫌がいいやうだ。

蟹が出た。

「おあがり、なさいませんか。」と長兄はお婿さんにもすすめて、自身まつさきに蟹の甲羅をむいた。

私は、ほつとした。

「失礼ですが、どなたです。」お婿さんは、無邪氣さうな笑顔で私に言つた。はつと思つた。無理もないとすぐに思ひ直して、

「はあ、あのう、英治さん（次兄の名）の弟です。」と笑ひながら答へたが、しよげてしまつて、これあ、英治さんの名前を出してもいけなかつたかしら、と卑屈に氣を使つて、次兄の顔色を伺つたが、次兄は知らん顔をしてゐるので、取りつく島も無かつた。ま、いいや、と私は膝を崩して、光ちやんに、こんどはビールをお酌させた。

金木の生家では、氣疲れがする。また、私は後で、かうして書くからいけないのだ。肉親を書いて、さうしてその原稿を売らなければ生きて行けないといふ悪い宿

業を背負つてゐる男は、神様から、そのふるさとを取りあげられる。所詮、私は、東京のあばらやで仮寝して、生家のなつかしい夢を見て慕ひ、あちこちうろつき、さうして死ぬのかも知れない。

● **ハイライト場面⑥**——念願かなつた子守のたけとの三十年ぶりの再会

五 西海岸

(中略)

翌る朝、従姉に起こされ、大急ぎでごはんを食べて停車場に駆けつけ、やつと一番の汽車に間に合った。けふもまた、よいお天気である。私の頭は朦朧としてゐる。二日酔ひの気味である。ハイカラ町の家には、こはい人もゐないので、前夜、少し飲みすぎたのである。脂汗が、じつとりと額に湧いて出る。爽かな朝日が汽車の中に射込んで、私ひとりが濁つて汚れて腐敗してゐるやうで、どうにも、かなはない

気持である。このやうな自己嫌悪を、お酒を飲みすぎた後には必ず、おそろくは数千回、繰り返して経験しながら、未だに酒を断然廃す気持にはなれないのである。この酒飲みといふ弱点のゆゑに、私はとかく人から軽んぜられる。世の中に、酒といふものさへなかつたら、私は或いは聖人にでもなれたのではなからうか、と馬鹿らしい事を大真面目で考へて、ぼんやり窓外の津軽平野を眺め、やがて金木を過ぎ、芦野公園といふ踏切番の小屋くらゐの小さい駅に着いて、金木の町長が東京からの帰りに上野で芦野公園の切符を求め、そんな駅は無いと言はれ憤然として、津軽鉄道芦野公園を知らんかと言ひ、駅員に三十分も調べさせ、たうとう芦野公園の切符をせしめたといふ昔の逸事を思ひ出し、窓から首を出してその小さい駅を見ると、いましも久留米緋の着物に同じ布地のモンペをはいた若い娘さんが、大きい風呂敷包みを二つ両手にさげて切符を口に唾へたまま改札口に走つて来て、眼を軽くつぶつて改札の美少年の駅員に顔をそつと差し出し、美少年も心得て、その真白い齒列の間にはさまれてある赤い切符に、まるで熟練の歯科医が前歯を抜くやうな手つき

で、器用にばちんと鉄を入れた。少女も美少年も、ちつとも笑はぬ。当り前の事のやうに平然としてゐる。少女が汽車に乗つたとたんに、ごとんと発車だ。まるで、機関手がその娘さんの乗るのを待つてゐたやうに思はれた。こんなのどかな駅は、全国にもあまり類例が無いに違ひない。金木町長は、こんどまた上野駅で、もつと大声で、芦野公園と叫んでもいいと思つた。汽車は、落葉松の林の中を走る。この辺は、金木の公園になつてゐる。沼が見える。芦の湖といふ名前である。この沼に兄は、むかし遊覧のボートを一艘寄贈した筈である。すぐに、中里に着く。人口、四千くらゐの小邑である。この辺から津軽平野も狭小になり、この北の内潟、相内、脇元などの部落に到ると水田もめつきり少くなるので、まあ、ここは津軽平野の北門と言つていいかも知れない。私は幼年時代に、ここの金丸といふ親戚の呉服屋さんへ遊びに来た事があるが、四つくらゐの時であらうか、村のはづれの滝の他には、何も記憶に残つてゐない。

「修つちやあ。」と呼ばれて、振り向くと、その金丸の娘さんが笑ひながら立つてゐる。私より一つ二つ年上だつた筈であるが、あまり老けてゐない。

「久し振りだなう。どこへ。」

「いや、小泊だ。」私はもう、早くだけに逢ひたくて、他の事はみな上の空である。

「このバスで行くんだ。それちやあ、失敬。」

「さう。帰りには、うちへも寄つて下さいよ。こんどあの山の上に、あたらしい家を建てましたから。」

指差された方角を見ると、駅から右手の緑の小山の上に新しい家が一軒立つてゐる。たけの事さへ無かつたら、私はこの幼馴染との奇遇をよろこび、あの新宅にもきつと立寄らせていただき、ゆつくり中里の話でも伺つたのに違ひないが、何せ一刻を争ふみたいに意味も無く気がせていたので、

「ちや、また。」などと、いい加減なわけかたをして、さつきとバスに乗つてしまつた。バスは、かなり込んでゐた。私は小泊まで約二時間、立つたままであつた。中里から以北は、全く私の生れてはじめて見る土地だ。津軽の遠祖と言はれる安東

氏一族は、この辺に住んでみて、十三港の繁栄などに就いては前にも述べたが、津軽平野の歴史の中心は、この中里から小泊までの間に在ったものらしい。バスは山路をのぼって北に進む。路が悪いと見えて、かなり激しくゆれる。私は網棚の横の棒にしっかりとつかまり、背中を丸めてバスの窓から外の風景を覗き見る。やつぱり、北津軽だ。深浦などの風景に較べて、どこやら荒い。人の肌の匂ひが無いのである。山の樹木も、いばらも、笹も、人間と全く無関係に生きてゐる。東海岸の竜飛などに較べると、ずっと優しいけれど、でも、この辺の草木も、やはり「風景」の一步手前のもので、少しも旅人と会話をしない。やがて、十三湖が冷え冷えと白く目前に展開する。浅い真珠貝に水を盛つたやうな、気品はあるがはかない感じの湖である。波一つない。船も浮んでゐない。ひっそりしてゐて、さうして、なかなかひろい。人に捨てられた孤独の水たまりである。流れる雲も飛ぶ鳥の影も、この湖の面には写らぬといふやうな感じた。十三湖を過ぎると、まもなく日本海の海岸に出る。この辺からそろそろ国防上たいせつな箇所になるので、れいに依つて以後は、こま

かい描写を避けよう。お昼すこし前に、私は小泊港に着いた。ここは、本州の西海岸の最北端の港である。この北は、山を越えてすぐ東海岸の竜飛である。西海岸の部落は、ここでおしまひになつてゐるのだ。つまり私は、五所川原あたりを中心にして、柱時計の振子のやうに、旧津軽領の西海岸南端の深浦港からふらりと舞ひもどつてこんどは一気に同じ海岸の北端の小泊港まで来てしまつたといふわけなのである。ここは人口二千五百くらゐのささやかな漁村であるが、中古の頃から既に他国の船舶の出入があり、殊に蝦夷通ひの船が、強い東風を避ける時には必ずこの港にはひつて仮泊する事になつてゐたといふ。江戸時代には、近くの十三港と共に米や木材の積出しがさかんに行はれた事など、前にもしばしば書いて置いたつもりだ。いまでも、この村の築港だけは、村に不似合ひなくらゐ立派である。水田は、村のはづれに、ほんの少しあるだけだが、水産物は相当豊富なやうで、ソイ、アブラメ、イカ、イワシなどの魚類の他に、コンブ、ワカメの類の海草もたくさんとれるらしい。

「越野だけ、といふ人を知りませんか。」私はバスから降りて、その辺を歩いてみる人をつかまへ、すぐに聞いた。

「こしの、たけ、ですか。」国民服を着た、役場の人が何かではなからうかと思はれるやうな中年の男が、首をかしげ、「この村には、越野といふ苗字の家がたくさんあるので。」

「前に金木にみた事があるんです。さうして、いまは、五十くらゐのひとなんです。」私は懸命である。

「ああ、わかりました。その人なら居ります。」

「おますか。どこにみます。家はどの辺です。」

私は教へられたとほりに歩いて、たけの家を見つけた。間口三間くらゐの小さなまりした金物屋である。東京の私の草屋よりも十倍も立派だ。店先にカーテンがおろされてある。いけない、と思つて入口のガラス戸に走り寄つたら、果して、その戸に小さい南京錠が、びちりとかかつてゐるのである。他のガラス戸にも手をかけ

てみたが、いづれも固くしまつてゐる。留守だ。私は途方にくれて、汗を拭つた。引越した、なんて事は無からう。どこかへ、ちよつと外出したのか。いや、東京と違つて、田舎ではちよつとの外出に、店にカーテンをおろし、戸じまりをするなどといふ事は無い。二、三日あるいはもつと永い他出か。こいつあ、だめだ。たけは、どこか他の部落へ出かけたのだ。あり得る事だ。家さへわかつたら、もう大丈夫と思つてみた僕は馬鹿であつた。私は、ガラス戸をたたき、越野さん、越野さん、と呼んでみたが、もとより返事のある筈は無かつた。溜息をついてその家から離れ、少し歩いて筋向ひの煙草屋にはひり、越野さんの家には誰もゐないやうですが、行先きをご存じないかと尋ねた。その痩せこけたおばあさんは、運動会へ行つたんだらう、と事もなげに答へた。私は勢ひ込んで、

「それで、その運動会は、どこでやつてゐるのです。この近くですか、それとも。」すぐそこだといふ。この路をまつすぐに行くといふと田圃に出て、それから学校があつて、運動会はその学校の裏でやつてゐるといふ。

「けさ、重箱をさげて、子供と一緒に行ききましたよ。」

「さうですか。ありがたう。」

教へられたとほりに行くと、なるほど田圃があつて、その畦道を伝つて行くと砂丘があり、その砂丘の上に国民学校が立つてゐる。その学校の裏に廻つてみて、私は、呆然とした。こんな氣持をこそ、夢見るやうな氣持といふのであらう。本州の北端の漁村で、昔と少しも変らぬ悲しいほど美しく賑やかな祭礼が、いま目の前で行はれてゐるのだ。まづ、万国旗。着飾つた娘たち。あちこちに白昼の酔っぱらひ。さうして運動場の周囲には、百に近い掛小屋がぎつしりと立ちならび、いや、運動場の周囲だけでは場所が足りなくなつたと見えて、運動場を見下せる小高い丘の上にも、<sup>むしろ</sup>筵で一つ一つきちんとかこんだ小屋を立て、さうしていまはお昼の休憩時間らしく、その百軒の小さい家のお座敷に、それぞれの家族が重箱をひろげ、大人は酒を飲み、子供と女は、ごはん食べながら、大陽気で語り笑つてゐるのである。日本は、ありがたい国だと、つくづく思つた。たしかに、日出づる国だと思つた。

国運を賭しての大戦争のさいちゆうでも、本州の北端の寒村で、このやうに明るく不思議な大宴会が催されて居る。古代の神々の豪放な笑ひと闊達な舞踏をこの本州の僻陬に於いて直接に見聞する思ひであつた。海を越え山を越え、母を捜して三千里歩いて、行き着いた国の果の砂丘の上に、華麗なお神樂が催されてゐたといふやうなお伽喃の主人公に私はなつたやうな氣がした。さて、私は、この陽気なお神樂の群集の中から、私の育ての親を捜し出さなければならぬ。わかれてから、もはや三十年近くなるのである。眼の大きい頬ぺたの赤いひとであつた。右か、左の眼蓋の上に、小さい赤いほくろがあつた。私はそれだけしか覚えてゐないのである。逢へば、わかる。その自信はあつたが、この群集の中から捜し出す事は、むづかしいなあ、と私は運動場を見廻してべそをかいた。どうにも、手の下しやうが無いのである。私はただ、運動場のまはりを、うろろ歩けばかりである。

「越野たけといふひと、どこにゐるか、ご存じぢやありませんか。」私は勇氣を出して、ひとりの青年にたづねた。「五十くらゐのひとで、金物屋の越野ですが。」それ

が私のだけに就いての知識の全部なのだ。

「金物屋の越野。」青年は考へて、「あ、向うのあのへんの小屋にみたやうな気がするな。」

「さうですか。あのへんですか？」

「さあ、はつきりは、わからない。何だか、見かけたやうな気がするんだが、まあ、捜してごらん。」

その捜すのが大仕事なのだ。まさか、三十年振りで云々と、青年にきざつたらしく打明け話をするわけにも行かぬ。私は青年にお礼を言ひ、その漠然と指差された方角へ行つてまごまごしてみたが、そんな事でわかる筈は無かつた。たうとう私は、昼食さいちゆうの団欒の掛小屋の中に、ぬつと顔を突き入れ、

「おそれいます。あの、失礼ですが、越野だけ、あの、金物屋の越野さんは、こちらちやございませんか。」

「ちがひますよ。」ふとつたおかみさんは不機嫌さうに眉をひそめて言ふ。

「さうですか。失礼しました。どこか、この辺で見かけなかつたでせうか。」

「さあ、わかりませんねえ。何せ、おほぜいの人ですから。」

私は更にまた別の小屋を覗いて聞いた。わからない。更にまた別の小屋。まるで何かに憑かれたみたい、だけはみませんか、金物屋のだけはみませんか、と尋ね歩いて、運動場を二度もまはつたが、わからなかつた。二日酔ひの気味なので、のどがかわいてたまらなくなり、学校の井戸へ行つて水を飲み、それからまた運動場へ引返して、砂の上に腰をおろし、ジャンパーを脱いで汗を拭き、老若男女の幸福さうな賑はひを、ぼんやり眺めた。この中に、あるのだ。たしかに、あるのだ。いまごろは、私のこんな苦勞も何も知らず、重箱をひろげて子供たちに食べさせてゐるのであらう。いつそ、学校の先生にたのんで、メガホンで「越野たけさん、御面会。」とでも叫んでもらうかしら、とも思つたが、そんな暴力的な手段は何としてもイヤだつた。そんな大袈裟な悪ふざけみたいいな事までして無理に自分の喜びをでつち上げるのはイヤだつた。縁が無いのだ。神様が逢ふなどおつしやつてゐるのだ。

帰らう。私は、ジャンパーを着て立ち上った。また畦道を伝って歩き、村へ出た。運動会のすむのは四時頃か。もう四時間、その辺の宿屋で寝ころんで、たけの帰宅を待つてみたつていいぢやないか。さうも思ったが、その四時間、宿屋の汚い一室でしよんぼり待つてゐるうちに、もう、たけなんかどうでもいいやうな、腹立たしい気持になりやしないだらうか。私は、いまのこの気持のままに逢ひたいのだ。しかし、どうしても逢ふ事が出来ない。つまり、縁が無いのだ。はるばるここまでたづねて来て、すぐそこに、いまゐるといふ事がちやんとわかつてゐながら、逢へずに帰るといふのも、私のこれまでの要領の悪かつた生涯にふさはしい出来事なのかも知れない。私が有頂天で立てた計画は、いつでもこのやうに、かならず、ちぐはぐな結果になるのだ。私には、そんな具合のわるい宿命があるのだ。帰らう。考へてみると、いかに育ての親とはいつても、露骨に言へば使用人だ。女中ぢやないか。お前は、女中の子か。男が、いとしをして、昔の女中を慕つて、ひとめ逢ひたいだのなんだの、それだからお前はだめだといふのだ。兄たちがお前を、下品

なめめしい奴と情無く思ふのも無理がないのだ。お前は兄弟中でも、ひとり違つて、どうしてこんなにならなく、きたならしく、いやしいのだらう。しつかりせんかい。私はバスの発着所へ行き、バスの出発する時間を聞いた。一時三十分の中里行きが出る。もう、それつきりで、あとは無いといふ事であつた。一時三十分のバスで帰る事にきめた。もう三十分くらゐあひだがある。少しおなかもすいて来てゐる。私は発着所の近くの薄暗い宿屋へ這入つて、「大急ぎでひるめしを食べたいのです。」と言ひ、また内心は、やつぱり未練のやうなものがあつて、もしこの宿が感じがよかつたら、ここで四時頃まで休ませてもらつて、などと考へてもゐたのであるが、断られた。けふは内の者がみな運動会へ行つてゐるので、何も出来ませんと病人らしいおかみさんが、奥の方からちらと顔をのぞかせて冷い返辞をしたのである。いよいよ帰ることにきめて、バスの発着所のベンチに腰をおろし、十分くらゐ休んでまた立ち上り、ぶらぶらその辺を歩いて、それぢやあ、もういちど、たけの留守宅の前まで行つて、ひと知れず今生いんせつやうのいとま乞ひでもして来ようと思つながら、

金物屋の前まで行き、ふと見ると、入口の南京錠がはづれてゐる。さうして戸が二、三寸あいてゐる。天のたすけ！と勇氣百倍、グワラリといふ品の悪い形容でも使はなければ間に合はないほど勢ひ込んでガラス戸を押しあげ、

「ごめん下さい、ごめん下さい。」

「はい。」と奥から返事があつて、十四、五の水兵服を着た女の子が顔を出した。私は、その子の顔によつて、たけの顔をはつきり思ひ出した。もはや遠慮をせず、土間の奥のその子のそばまで寄つて行つて、

「金木の津島です。」と名乗つた。

少女は、あ、と言つて笑つた。津島の子供を育てたといふ事を、たけは、自分の子供たちにもかねがね言つて聞かせてゐたのかも知れない。もうそれだけで、私とその少女の間に、一切の他人行儀が無くなつた。ありがたいものだと思つた。私は、たけの子だ。女中の子だつて何だつてかまはない。私は大声で言へる。私は、たけの子だ。兄たちに軽蔑されたつていい。私は、この少女ときやうだいだ。

「ああ、よかつた。」私は思はずさう口走つて、「たけは？ まだ、運動会？」

「さう。」少女も私に対しては毫末の警戒も含羞もなく、落ちついて首肯き、「私は腹がいたくて、いま、薬をとりて帰つたの。」氣の毒だが、その腹いたが、よかつたのだ。腹いたに感謝だ。この子をつかまへたからには、もう安心。大丈夫だけに逢へる。もう何が何でもこの子に縋つて、離れなれやいいのだ。

「ずいぶん運動場を捜し廻つたんだが、見つからなかつた。」

「さう。」と言つてかすかに首肯き、おなかを小さへた。

「まだ痛いか。」

「すこし。」と言つた。

「薬を飲んだか。」

黙つて首肯き。

「ひどく痛いか。」

笑つて、かぶりを振つた。

「それぢやあ、たのむ。僕を、これから、たけのところへ連れて行つてくれよ。お前もおなかが痛いだらうが、僕だつて、遠くから来たんだ。歩けるか。」

「うん。」と大きく首肯した。

「偉い、偉い。ぢやあ一つたのおよよ。」

うん、うんと二度続けて首肯き、すぐ土間へ降りて下駄をつつかけ、おなかをさへて、からだをくの字に曲げながら家を出た。

「運動会で走つたか。」

「走つた。」

「賞品をもらったか。」

「もらはない。」

おなかをさへながら、とつと私の先に立つて歩く。また畦道をとほり、砂丘に出て、学校の裏へまはり、運動場のまんなかを横切つて、それから少女は小走りになり、一つの掛小屋へはひり、すぐそれと入違ひに、たけが出て来た。たけは、う

つろな眼をして私を見た。

「修治だ。」私は笑つて帽子をとつた。

「あらあ。」それだけだつた。笑ひもしない。まじめな表情である。でも、すぐにその硬直の姿勢を崩して、さりげないやうな、へんに、あきらめたやうな弱い口調で、「さ、はひつて運動会を。」と言つて、たけの小屋に連れて行き、「ここさお坐りになりせえ。」とたけの傍に坐らせ、たけはそれきり何も言はず、きちんと正座してそのモンペの丸い膝にちやんと両手を置き、子供たちの走るのを熱心に見てゐる。けれども、私には何の不满もない。まるで、もう、安心してしまつてゐる。足を投げ出して、ぼんやり運動会を見て、胸中に、一つも思ふ事が無かつた。もう、何がどうなつてもいいんだ、といふやうな全く無憂無風の情態である。平和とは、こんな気持の事を言ふのであらうか。もし、さうなら、私はこの時、生れてはじめて心の平和を体験したと言つてもよい。先年なくなつた私の生みの母は、気品高くおだやかな立派な母であつたが、このやうな不思議な安堵感を私に与へてはくれなかつた。

世の中の母といふものは、皆、その子にこのやうな甘い放心の慈ひを与へてやつてゐるものなのだらうか。さうだつたら、これは、何を置いても親孝行をしたくなるにきまつてゐる。そんな有難い母といふものがありながら、病氣になつたり、なまけたりしてゐるやつのは、親孝行は自然の情だ。倫理ではなかつた。

たけの頬は、やつぱり赤くて、さうして、右の眼蓋の上には、小さい罌粟粒ほどの赤いほくろが、ちやんとある。髪には白髪もまじつてゐるが、でも、いま私のわきにきちんと坐つてゐるたけは、私の幼い頃の思ひ出のたけと、少しも變つてゐない。あとで聞いたが、たけが私の家へ奉公に来て、私をおぶつたのは、私が三つで、たけが十四の時だつたといふ。それから六年間ばかり私は、たけに育てられ教へられたのであるが、けれども、私の思ひ出の中のたけは、決してそんな、若い娘ではなく、いま眼の前に見るこのたけと寸分もちがはない老成した人であつた。これもあとで、たけから聞いた事だが、その日、たけの締めてゐたアヤメの模様の紺色の帯は、私の家に奉公してゐた頃にも締めてゐたもので、また、薄い紫色の半襟も、

やはり同じ頃、私の家からもらったものだといふ事である。そのせりもあつたのかも知れないが、たけは、私の思ひ出とそっくり同じ匂ひで坐つてゐる。だぶん鼻肩目であらうが、たけはこの漁村の他のアバ（アヤの Femme）たちとは、まるで違つた氣位を持つてゐるやうに感ぜられた。着物は、縞の新しい手織木綿であるが、それと同じ布地のモンペをはき、その縞柄は、まさか、いきではないが、でも、選択がしつかりしてゐる。おろかしくない。全体に、何か、強い雰囲気を持つてゐる。私も、いつまでも黙つてゐたら、しばらく経つてたけは、まっすぐ運動会を見ながら、肩に波を打たせて深い長い溜息をもらした。たけも平氣ではないのだな、と私にはその時はじめてわかつた。でも、やはり黙つてゐた。

たけは、ふと氣がついたやうにして、

「何か、たべないか。」と私に言った。

「要らない。」と答へた。本当に、何もたべたくなかつた。

「餅があるよ。」たけは、小屋の隅に片づけられてある重箱に手をかけた。

「いいんだ。食ひたくないんだ。」

たけは軽く首肯いてそれ以上すすめようともせず、

「餅のはうでないんだものな。」と小声で言つて微笑んだ。三十年ちかく互ひに消息が無くても、私の酒飲みをちやんと察してゐるやうである。不思議なものだ。私にやにやしてゐたら、たけは眉をひそめ、

「たばこも飲むなう。さつきから、立てつづけにふかしてゐる。たけは、お前に本を読む事だば教へたけれども、たばこだの酒だのは、教へねきやなう。」と言つた。油断大敵のれいである。私は笑ひを収めた。

私が真面目な顔になつてしまつたら、こんどは、たけのはうで笑ひ、立ち上つて、  
「竜神様の桜でも見に行くか。どう？」と私を誘つた。

「ああ、行かう。」

私は、たけの後について掛小屋のうしろの砂山に登つた。砂山には、スマレが咲いてゐた。背の低い藤の蔓も、這ひ拡がつてゐる。たけは黙つてのぼつて行く。私

も何も言はず、ぶらぶら歩いてついで行つた。砂山を登り切つて、だらだら降りると竜神様の森があつて、その森の小路のところどころに八重桜が咲いてゐる。たけは、突然、ぐいと片手をのばして八重桜の小枝を折り取つて、歩きながらその枝の花をおしつて地べたに投げ捨て、それから立ちどまつて、勢ひよく私のはうに向き直り、にはかに、堰を切つたみたいに能弁になつた。

「久し振りだなあ。はじめは、わからなかつた。金木の津島と、うちの子供は言つたが、まさかと思つた。まさか、来てくれるとは思はなかつた。小屋から出てお前の顔を見ても、わからなかつた。修治だ、と言はれて、あれ、と思つたら、それから、口がきけなくなつた。運動会も何も見えなくなつた。三十年ちかく、たけはお前に逢ひたくて、逢へるかな、逢へないかな、とそればかり考へて暮してゐたのを、こんなにちやんと大人になつて、たけを見たくて、はるばると小泊までたづねて来てくれたかと思ふと、ありがたいのだから、うれしいのだから、かなしいのだから、そんな事は、どうでもいいぢや、まあ、よく来たなあ、お前の家に奉公に行つた時には、

お前は、ぱたぱた歩いてはころび、ぱたぱた歩いてはころび、まだよく歩けなくて、ごはんの時には茶碗を持ってあちこち歩きまはつて、庫の石段の下でごはんを食べるのが一ばん好きで、たけに昔噺語らせて、たけの顔をどつくと思ながら一匙づつ養はせて、手かずもかかったが、愛ごくでなう、それがこんなにおとなになつて、みな夢のやうだ。金木へも、たまに行つたが、金木のまちを歩きながら、もしやお前がその辺に遊んでゐないかと、お前と同じ年頃の男の子供をひとりひとり見て歩いたものだ。よく来たなあ。」と一語、一語、言ふたびごとに、手にしてゐる桜の小枝の花を夢中で、むしり取つては捨て、むしり取つては捨ててゐる。

「子供は？」たうとうその小枝もへし折つて捨て、両肘を張つてモンペをゆすり上げ、「子供は、幾人」

私は小路の傍の杉の木に軽く寄りかかつて、ひとりだ、と答へた。

「男？ 女？」

「女だ。」

「いくつ？」

次から次と矢継早に質問を發する。私はたけの、そのやうに強くて不遠慮な愛情のあらはし方に接して、ああ、私は、たけに似てゐるのだと思つた。きやうだいで、私ひとり、粗野で、がらつぱちのところがあるのは、この悲しい育ての親の影響だつたといふ事に氣附いた。私は、この時はじめて、私の育ちの本質をはつきり知らされた。私は断じて、上品な育ちの男ではない。だうりで、金持ちの子供らしくないところがあつた。見よ、私の忘れ得ぬ人は、青森に於けるT君であり、五所川原に於ける中畑さんであり、金木に於けるアヤであり、さうして小泊に於けるだけである。アヤは現在も私の家に仕へてゐるが、他の人たちも、そのおかし一度は、私の家にゐた事がある人だ。私は、これらの人と友である。

さて、古聖人の獲麟を氣取るわけでもないけれど、聖戦下の新津輕風土記も、作者のこの獲友の告白を以て、ひとまづペンをとどめて大過ないかと思はれる。まだまだ書きたい事が、あれこれとあつたのだが、津輕の生きてゐる雰囲気は、以上で

だいたい語り尽したやうにも思はれる。私は虚飾を行はなかつた。読者をだまはしなかつた。さらば読者よ、命あらばまた他日。元氣で行かう。絶望するな。では、失敬。

(注) テキストは、青空文庫に依ります。